

相沢伸広著「華人と国家 -- インドネシアのナチ問題」(新刊紹介)

著者	相沢 伸広
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	179
ページ	55-55
発行年	2010-08
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00046378

相沢伸広 著

『華人と国家—インドネシアのチナ問題』

書籍工房早山、二〇一〇年



大規模な華人社会を抱えている国は、そうでない国とは異なる政治課題に直面する。

その政治課題とは、刻々と変化する中国の政治経済と、変容する国内の華人社会と、その両者との間で、どのような関係を構築するべきかという政治判断である。

国内に抱えた華人社会が大きいと、かじ取りを少し間違えただけで、国家が被る損失は大規模なものになりかねない。そのような緊張感が、大きな華人社会を抱えた国の政治には存在している。

では、そのような政治とは一体どのようなものだろうか。本書はこの問いについて、インドネシアを舞台にして、明らかにしようとするものである。華人、もしくは華僑という言葉で、みなさんほどのような人たちを思い浮かべるだろうか。大成功を収めた企業家、ナショナルリズムに燃える革命家、クーリーと呼ばれる労働者、人権侵害に苦しむ被差別市民、世界に広がるネットワーク、違法ビジネスを展開する非合法組織、といったように、華人といっても、一般にそのイメージは実に多様であり、時代と場所とともに変遷してきた。本書ではそんな多様な歴

史の中でも、一九六五年から二〇〇六年のインドネシア、特にスハルト時代のインドネシアにおける、華人と国家の關係に焦点を当てて。インドネシアを対象とするのは、第一にインドネシアの華人社会が世界最大規模であるためであり、第二に、世界的にみても、インドネシアの特にこの時期、華人の位置づけが国家との關係においてもっとも揺れ、「問題」になってきたからである。

規模の大きさ、そして問題の複雑さゆえに、インドネシアの華人をめぐる経験は、他の華人社会を理解するための知見の宝庫であり、同時に、華人をめぐる問題群は、あらゆる国家の政策課題に深くかかわることから、インドネシアの政治を理解するために不可欠なテーマでもある。こうした理由が、本書の執筆のきっかけとなった。

これまで、インドネシアにおいて、華人は大きな政治経済変動のたびに、暴動の標的になり、他方では、アジアの経済成長の時代において、華人は、民間経済の牽引役として、極めて優秀な企業家として、広く注目されてきた。時代の変化によって、華人は国家にとって、排除すべき脅威になり、取り

込むべき資本にもなったのである。それでは、このような国家と華人の關係の揺れは、どのようにして起きてきたのだろうか。その理由を求め、私は、スハルト政権下の国軍や諜報機關の未公開資料を集め、華人政策を実行した軍人たちへのインタビューを重ね、歴史を追った。(華人に対する苛烈な政策を立案、実行した当人たちが存命であり、かつ、その経験をつまびらかにしてくれたのは、本当に幸運であった。)

華人と国家をめぐる關係の揺れの原因は、簡単にまとめると、三つのレベルの政治に求められる。

第一に政権内における権力闘争である。華人を排除することで、権力の座をつかもうとする人々と、華人を活用し取り込むことで権力を得ようとするグループ間の力関係で、華人に対する政治は厳しくも緩くもなった。第二に政治体制の安定度である。スハルト体制の創生期には、権力基盤がまだ弱く、基盤強化のために、治安・秩序の維持が政策的に優先され、華人は潜在的反体制勢力と位置づけられ、厳しい取り締まりの対象となった。ところが、体制が安定し華人への脅威感も薄れると、今度は経済的な貢献を求められるようになり、華人問題は安全保障問題から、経済問題へと変化した。第三に地域秩序の変容(とりわけ中国の変化)である。中国が共産主義革命の輸出を進めていた時期には、中国は警戒すべき脅威であり、その手先と見なされた華人もまた、国内において脅威であると位置づけられた。しかしながら、中

国が経済発展し魅力的な国に変わると、華人はインドネシアと中国の両者を結ぶ貴重な紐帯とみなされるようになった。華人の存在は、問題ではなく突然、資産になったのである。

このように、インドネシアでは権力闘争、体制の安定度、地域秩序の三つのレベルの変化を通じて、華人を様々なかたちで問題視する現実が産まれていた。

現在のインドネシアにおいては、中国との關係の好転、スハルト体制崩壊後の権利回復運動の成功によって、華人の位置づけは好転した。しかしながら、歴史的に培われた華人をめぐる緊張感をぬぐい去るのは容易ではない。少し歴史を遡って、インドネシアにおける国家と華人の關係を検討すると、同じアジアでも、こうした国々が日本とは異なる政治社会環境にいることを改めて教えてくれる。中国と東南アジアの間には日本にはない特別な紐帯、通常の外交とは違うレベルの國際關係が存在し、日本ではそのつながりを羨む声もあるが、他方で大規模な華人社会があるからこそ考慮しなければならぬ政治の緊張感があることは見落とせない。

本書は一義的には、スハルト体制下のインドネシアに関する政治史研究ではあるが、インドネシアの政治理解のみならず、より広いアジアの華人社会を抱えた国の政治理解を求める方々にも、手にとってもらえれば幸いである。

(あいざわ のぶひろ／イサカ海外研究員)